

---

---

## 医者と患者、コミュニケーションはどっちが上手？

福 田 あつ子 (福岡市博多区在住 会社員)

「インフォームド・コンセント」という言葉が、すこしばかり市民権を獲得しているようです。限られた時間内で病状を話し、質問し、さらに納得したいのですが、現実はどうも空回り。あらかじめ質問事項などをメモして診療室へ向かってもお尋ねしたいことの半分達成はいいほうで、あげくシツコイ患者と思われているのではないかと、と医師の顔色を窺うありさま。なぜ、病院でお医者さんの前に座ると、遠慮しちゃうのかな、と思います。これまで質問を嫌う先生、対話が成り立たない先生にたびたび遭遇してきた経験がそうさせるのか。患者は決してお医者さんと対等ではありえませんが、診て、治して、教えていただかねばならない専門医に対して、患者は弱い立場ではないでしょうか。お医者さん側からもわがままな患者が多いという指摘などもあるでしょう。しかし、お医者さんのほうにより職業的プロ意識が高く求められるはず。 「インフォームド・コンセント」が成立するためには、個を尊重する風土なりの背景のもと、医師をはじめとしたスタッフと患者の対等な人間関係が要かと思えます。さらにうかびあがるのは、お医者さんも患者もお互いさまに会話力のなさ、コミュニケーション下手。いまさら

文化がどうのといってもラチあきませんが、辛かったり、不安いっぱいでも向う病院では、明るく会話できる環境がほしい。たとえ短い時間であろうと中身の濃い対話は充分可能。これは病院に限らず、会話やコミュニケーション能力のレベルアップは医者、患者を問わず私たちの課題ではないかと思っています。

ところで、わが家にとって全幅の信頼と安心感が年とともに築かれた医療施設があります。それは「ウエルビーイング」、16年前は「子どもの歯を守る会」でした。高1の子どもがいまだにムシ歯なしでいられるのは、1歳半から3ヵ月ごとの検診を受けたからです。私自身も5年程前から定期検診を受け、口の中が著しく改善されました。歯や歯茎が快調なことは、とても気持ちがいいことです。すっかり馴染んだスタッフの先生や歯科衛生士さんたちとの長年の対話の積み重ねの中で、口の中と心身の健康との密接さも知ることになりました。とてもやめられない、楽しみな検診なのです。将来、歯科だけではなく、体全体の予防的なアドバイスやチェックをしてくれる「ウエルビーイング」のような存在の医療の場が身近にできることを望んでいます、どうでしょう。